コリント人への手紙第一 10 章 23-33 節「すべて神の栄光を現わすために」

小池 宏明 師

コリントにある教会では、偶像に捧げられた肉について、信徒同士で意見が分かれて対立していた。ある信徒たちは、偶像の神々など存在しないから、気にしないで何でも自由に食べたらいいと主張していた。一方、鋭い良心を持っているナイーブな信徒たちの中には、偶像との交わりを持つことになるから食べるべきではない、と警戒している人たちもいた。この問題についての最終的な結論が述べられる。

＊偶像の背後に悪霊あり

木や石で作られた偶像は、人間が好き勝手に作ったもので無意味だが、その背後で、まことの神様を拝することを妨害している悪霊の働きがあるから、パウロはこの悪霊と交わる者にならないでほしいと願っていた。(19-21 節)

＊市場で売られている肉は

続いて、偶像の神殿に捧げられた肉が、市場で売られていて、それを買って家で食べることについては、どう考えたらいいか教えている。(25-26 節)パウロは、どこをどのように流通して来ても、肉は食べ物に過ぎないから、気にしないで食べなさいと勧めている。原材料は、自然界にある神様が造られたものだから、神様に感謝のお祈りを捧げながら頂けばいいのである。

＊未信者に招待された食卓では

さらに、偶像の神殿での飲食ではないが、未信者の家に招かれて食事をする場合について教えている。(27 節)招かれ会食の場では、全ての物を感謝して頂きなさい、と言うことだ。そうすることが招待して下さった未信者との関係を良好するためにも大切なことで、未信者との良い関係ができれば救いのチャンスにもなるだろう。パウロ自身は、信仰者が神様に感謝しながら何を食べようが、他の人からとやかく言われることは無い(30 節)と思っているが、周りの人々がつまずくことがないように配慮することが、もっと大切だと考えている。

＊すべて神の栄光のために

最終的な結論は、何をするにも神の栄光を現わすために行動しなさい(31 節)、ということである。すべての発言や行動や、すべての生き様を通して主なる神様のみが崇められるようにしなさいという意味である。言葉によって伝えるだけではなく、食べるにも飲むにも、何をするにも、私たちは、
神の愛と聖さを表すことができる。私の言動を振り返って
他人をつまずかせ、悲しませて、傷つけていないか
どうか、振り返って悔い改めて再出発しよう。